

ポピュラー音楽から考える 東地中海の現代史

磯子高校 手塚 優紀子

民族音楽の研究者江波戸昭は地中海世界をアジア・アフリカ・ヨーロッパに分けることについて「地中海世界の歴史のなから、ギリシア・ローマだけを取り出してヨーロッパに『横流し』」した結果であり、きわめて不自然な枠組みだと批判しています。この批判は古代のみならず現代史においても当を得ていると思います。そこで、ポピュラー音楽を指標とし、三人の音楽家の人生を通して東地中海地域の現在を考えてみました。

一、サズとブズーキ

東地中海のポピュラーで広く使われている楽器があります。その名はサズ。日本の琵琶と同形の胴にとても長い棹を持つ五弦の楽器で、足を交差させてすわり、膝の間で胴をささえて指で弦をはじきます。ところで、ギリシアだけはサズを使いません。ギリシアでは図の左上のブズーキを使います。サズに比べ胴が異様に小さく四弦です。表現力はサズよりかなり劣ります。ブズーキは一八世紀後半にギリシア人の反オスマン闘争の中から生まれました。ギリシア人はバルカンの山岳部にくらす自由牧民や山賊に仮託した抵抗歌（クレフィテカ）を歌い広めます。官憲に見とがめられた時楽器を道具箱などにかくせれば誰が歌をリードしていたかはわからないはず。そこで、歌手はサズを小型化する工夫をしました。こうしてブズー



キが誕生します。初期のブズーキは棹も短く三弦でした。ギリシアの独立後支配層は急速に西欧に傾斜し、伝統歌謡を「野蛮な百姓の歌」と排斥します。オスマン起源のブズーキも忘れられましたが、アナトリアに残った人々はブズーキをひき続けていました。

ブズーキがギリシアによみがえるのは一九二二年のことです。ギリシア・トルコ戦争の結果アナトリアのギリシア人はトルコを追放されました。イズミールのギリシア人は難民となって首都アテネに

流れこみ、「トルコなまりを話す連中」と侮蔑されながら造船所の最底辺の労働者として糊口をしのぎます。しかし、彼らは本国の人々より文化的にははるかに洗練されていました。彼らの唯一の楽しみは家族で食堂に行き、ブズーキの伴奏にあわせて歌うこと。失われた故郷への思いや日々の苦しみ、政治や社会への鋭い批判を彼らは即興で歌いあげました。その歌はレベティカとよばれ、知識人からは「下品で非ギリシヤ的」と忌み嫌われながらも次第にアテネの「町の歌」になっていったのです。

一九四〇年ギリシヤはドイツ・イタリアの侵略を受け全土を占領されます。国王は逃亡しますが、国民はE A M（民族解放戦線）を結成してレジスタンスを開始します。レベティカや民謡は、レジスタンスの隊歌や暗号歌として広く歌われました。軍事組織E A L S（人民解放軍）はドイツ軍の補給路を寸断して連合国の北アフリカでの勝利に貢献し、独力で国土の四分の三を回復します。それなのに、チャーチルとスターリンの取引によって四四年ギリシヤはイギリスに再占領されてしまいます。E A L Sは再占領と王の復帰に反対して内線に突入、四九年アメリカの全面介入によりE A L Sは敗北しました。この間E A Mの指導者の大半は強制収容所で殺されました。レジスタンスに参加した人々は共産主義者の烙印の下、市民権を奪われ、王の側近は対独協力者で固められます。この倒錯した状況のもと、一九五〇年代前半を最後にレベティカはその生命を失っていききました。

二、歌を抵抗の武器とした人たち

六〇年代にレベティカの批判精神を源とした新しい歌を創った人

がいます。ミクス・テオドラキスです。彼は十五歳でレジスタンスの隊歌を作曲したE A L Sの戦闘員として戦いました。そのため五二年まで収容所に閉じこめられ日夜拷問されるという苛烈な体験をしています。パリ音楽院に学びクラシックの作曲家として出発しましたが、その作品が本国でポピュラーとして広く歌われていると知ると迫害を覚悟の上で五九年帰国します。コンサートを開くたびに逮捕されるといった圧迫を耐えて、ついには「ミクスの歌を知らぬ者はギリシヤ人ではない」と言われるようになりました。六七年軍事クーデタが起こると地下に潜行し抵抗の組織化に奔走します。四月後逮捕され刑務所や流刑地を点々としながらも多くの人々の協力を得て抵抗の歌のテープを海外に送り続けました。七〇年国外追放となりフランスで三年間の記録を「抵抗の日記」の題で発表、七一年から各国でコンサートを開き軍政打倒を訴えました。七四年軍政が倒れると帰国し、八六年まで国会議員をつとめました。

八六年テオドラキスは音楽活動に専念するにあたってギリシヤとは犬猿の仲であるトルコの音楽家との共同製作を行います。相棒はズルフュ・リヴァネリ。彼も一九六〇年から八三年まで続いた祖国の軍政に抵抗して投獄と亡命の苦悩をなめた人です。スウェーデンに亡命中の七五年、トルコ現代詩の父ナスム・ヒクメットの名作「死んだ少女」を作曲して注目されました。七八年帰国するとヒクメットの詩で構成したアルバムを発表、シンガーソングライターとして認められました。ヒクメットは共産党員だったゆえに国を追われ望郷の詩を数多く残してモスクワに客死、その作品はトルコでは発禁でした。ヒクメットをとりあげるのは命がけの抵抗だったので、アルバムが大ヒットしたので軍は手を下しませんでした。二

人の民主化の闘士はアルバム「私のために太陽を集めて」でギリシアとトルコの文化的な絆の強さを広くアピールしたのです。テオドラキスはイギリスの記者の取材に、

「私たちを引き裂こうとするものよりも私たちを結びつけようとするものの力の方が強いはずです。」

と答えました。このことばはかつて彼がコンサート会場から警察に連行されるときにいつも聴衆に呼びかけたことばです。

三、ヤドランカのパスポート

日本にサズを本格的に紹介した人が旧ユーゴスラビアのヤドランカです。彼女は幼い頃からバルカン各地の民謡を学び民族楽器に親しみました。やがて民謡をもとにした創作や民族楽器を大胆にとり入れたジャズやロックの演奏で注目されます。八四年サラエボ冬季オリンピックで国の代表としてテーマソングを歌いました。画家でもある彼女は浮世絵の研究も兼ねて五年間日本で活動しようと来日します。八八年末のことでした。祖国はその頃うち続く経済不振と発展の不均衡に苦しみ、民族の名を借りて人々を煽動するデマゴーグがうごめき始めていました。九一年ついにユーゴは解体し内戦が始まります。ヤドランカのお父さんはセルビア系、お母さんはクロアチア系ですが、彼女は民族の違いなどまったく意識せずに育ちました。彼女は民族を問う日本人のジャーナリストにいつも

「父も母もユーゴ人でした。わたしもユーゴ人なのです。」

と答えました。生まれ故郷のサラエボは内戦の最も悲惨な現場としてくりかえし報道されます。

「サラエボは歩いていると、イスラムの寺院からコーランが聞こ

え、通りを隔てたキリスト教会からは賛美歌が流れ、その前をセルビア正教の司祭さんが黒い服をなびかせて通る、という町です。民族も文化も人々の暮らしも、ごく自然に混ざり合っている世界都市（コスモポリス）。そんな街が私は大好きで、早くから自分はコスモポリタンだと思っていました。」

九五年彼女のパスポートが失効となります。彼女は偏狭な民族主義をふりかざす新ユーゴを拒否し、国連の難民パスポートを取得します。異なるものが混ざりあい溶け合ってこそ豊かな文化が生まれると彼女は信じています。世界は私の田舎、私はまだ人間に絶望しなくないと語ります。殺戮の巷と化したサラエボにもようやく平和がもどった二〇〇〇年ようやく彼女は帰国しました。母は戦火の最中に亡くなり、父と妹は消息不明です。彼女は祖国と日本を往復しながら民族の共存をうながす歌を歌い続けています。

〈参考文献〉

- M・テオドラキス「抵抗の日記」 河出書房 一九七五
- P・エマニユエル「非西欧世界のポピュラー音楽」
ミュージック・マガジン 一九九二
- R・デンスロウ「音楽は世界を変える」
ソニー・マガジン 一九九二
- 江波戸昭「民衆のいる音楽」 晶文社 一九八一
- N・ヒクメット「詩集・死んだ少女」 国文社 一九七六
- 「ヒロシマの悲劇、トルコで歌い継がれる。」
朝日新聞 一九九五・八・五
- ヤドランカ「故郷に平和の戻る日」 婦人之友 一九九六・三